

青 嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

「帯状疱疹」のキツナ

フリーアンケート
開催中です

シグフイでお知らせして
いた通り、今週初めからか

先週から右目の下に違和感があり、腫れと少しのかゆみを感じていました。

ら二月六日金曜日まで二週間、フリー参観週間として学校を公開しています。案内にもありました、三学期を迎える成長した普段の生徒たちの姿を、保護者の皆さんに直接見て頂きたいと思います。

朝の会から授業、給食、昼休み、掃除、帰りの会、部活動まで、いつでも何度も構いません。中学生として青嶺中学校で生き生きと学び、活動する姿を見に是非足をお運びください。

中学生といえば思春期真っただ中です。御家庭での会話もなかなか続かないかもしれません、粘り強くいろいろな話題を投げかけ互いの気持ちを伝え合える対話ができるといいですね。一見そつけない反応でも、内心では結構嬉しいはずだと私は思います！

になると別の次の箇所が同じじようになりました。笑つたり、食事をしたりする時には症状が出たところの皮膚が突つ張り、痛かたり痺かつたりととても辛いです。また痛みにも周期があり、タイミングが読めません。顔にかざぶたが数か所、まだ腫れているところもあり、異常に気付いた生徒たちからは随分心配してもらいました。免疫が低下しているということで、疲れやストレスが自覚していないうちに蓄積していたようです。完治までもうしばらくかかりそうですが、なるべく体を休ませ、体力回復に努めます。

だいぶ時間がたつてからアラスカからの返事が返ってきました。その手紙には一言だけ「その疑問は君自身が解きなさい」と書かれてあり、渡航費として数万ドルの小切手が同封されていました。そうです。

それがきっかけとなり、アラスカに渡った赤祖父さんはアラスカ大学でオーロラを研究し、そののち教授となり、退官するまで五十年に渡り、アラスカに留まりました。そして国籍をアメリカに移し、アラスカ大学国際北極圏研究センターの所長を務めました。彼が退職する時に

ある時 どうしても分からな
い課題が出てきて、赤祖父さん
は途方に暮れていました。彼は
悩みに悩んで、当時のオーロラ
研究の権威である、アラスカ大
学フェアバンクス校の教授に、
その課題についての手紙をした
ためたそうです。

それぞれの人生が動き出すきっかけは様々ですが、強い「思い」があり、実現させたいという願いがあれば道は開けると思います。様々な出会いと別れ道、判断の積み重ねが自分の今の人生での立ち位置です。自分の人生をかける対象に出会えた人は、ある意味幸福なのかもしれないですし、そういう人は、これからも「探し続ける旅」を楽しむ幸福があるかもしれません。

いずれにしても、伝えたいことは自分の人生において判断し、行動する責任は自分自身に帰すという当たり前のことです。これか

ある、写真家の星野道夫さんも、
同様で、高校生の時に見たアラス
カの一枚の写真に強く惹かれまし
た。そして、その村の村長につた
ない英語の手紙を書きます。仕事
をするから滞在させてくれる家を
紹介してほしいと訴えたことから
アラスカへ渡ることになります。

がないこともあったと思ひます
が、全てが中学時代の思い出で、
成長の糧となるでしょう。故郷を
離れる人もいて、卒業を機にそれ
ぞれの選んだ道を歩んで行きま
す。これから的人生が「末広が
り」に幸せで、充実した豊かな時
間になつてほしいと願うばかりで
す。

アラスカ大学は、同セントラービルを赤祖父俊一ビルと命名し、その功績を永遠に称えています。

純粹な思いや好奇心は人の心を打つし、応援したくなるし、実際に会ってみたくなるものです。

自分の思いを胸にとどめておかずには、当時としては無謀で、可能性がほとんどないとはいえ、直接思いを伝えたことが、人生が動き出すきっかけになつたのです。

三年生の国語の教科書に書いて

らの未来を、自分の心に問い合わせながら、自分自身で道筋を決め、そして自分での意思で豊かな充実した人生を歩いてほしいと心から願っています。

校長室より

校長室より